

ワールドサッカーにおけるゲーム分析

—— 欧州サッカー選手権大会'96を対象として ——

鎌田 安久* 浅井 武** 栗林 徹*

(1996年12月9日受理)

GAME ANALYSIS ON 10TH UEFA EUROPEAN FOOTBALL CHAMPIONSHIP

Yasuhisa KAMADA, Takeshi ASAI and Toru KURIBAYASHI

現在の欧州のサッカー先進国におけるチーム戦術や技能について集約して分析することが可能な欧州サッカー選手権をイギリス現地で6試合視察分析し、そのうち、今回は準々決勝のドイツ代表 (vsクロアチア戦) と準決勝のイングランド代表 (vsドイツ戦) の2チームを対象としゲーム分析を行った。また、その際、前回のスウェーデン大会の分析から考えられた1.指導上のポイントや2.日本の問題点についての視点も含めてゲーム分析をおこなった。その結果、3-5-2システムを基調とする組織的で戦術的にもチームの構成選手の能力を活かしたチームのゲーム展開が攻守に渡り観られた。また、指導上の重要な要因と考えられるポイントや日本で問題点とされる技術面についても高いパフォーマンスが認められた。

[キーワード] サッカー ゲーム分析 欧州選手権 指導ポイント 日本の問題点

はじめに

1996年6月に渡英し欧州サッカー選手権を視察して得た分析資料をもとにゲーム分析を行った。4年に一度開催され、FIFAワールドカップよりも均一してレベルが高いといわれる欧州サッカー選手権では、現在の欧州のサッカー先進国におけるチーム戦術や技能について集約して分析することが可能である。4年前に分析対象とした前回欧州選手権スウェーデン大会では、個々には優秀な選手はいたが、特徴あるチーム戦術が徹底され、完成されたチームは少なかった。唯一各ポジションにタレント豊かな選手の揃ったオランダ代表チームでさえ、確実に勝利を得ることができず、選手の特長からリアクションサッカーを徹底させたデンマーク代表が優勝する結果となった。今回のイングランド大会は、

* 岩手大学教育学部保健体育科

** 山形大学教育学部保健体育科

FOOTBALL COMES HOME という大会標語に示されるように、近代サッカーの発祥の地イングランドで開催されたため、開催地の関心度は高く、地元イングランド代表チームへの期待も著しいものが予想された。そのためサッカーの母国を自負するイングランド代表チームがこの大会に掛けてきた意気込みは強く、完成度の高いパフォーマンスを観ることができであろう。また、2年前のFIFAワールドカップ決勝のPK戦で破れ準優勝のイタリア、過去FIFAワールドカップ優勝3回、欧州選手権優勝2回の強豪ドイツ、タレント集団オランダ、クロアチア、さらにはまた、2年後のFIFAワールドカップ開催を控え強化が進んでいるフランス等が今大会をいかなる戦術で戦うかがポイントであった。

また、前回のスウェーデン大会の分析から考えられたI.指導上のポイントやII.日本の問題点は以下の通り、

- I. 指導上のポイント；冷静な読み（→考えること；シュート。パス。サポートのタイミング。角度。距離、次の手、指示、時間とスペース）。狙い（特にWITHOUT THE BALL）。闘争心、精神的耐性。
- II. 日本の問題点；①パススピード。②フタタッチコントロール。③ボディーシェイプ。④DFマークの原則 ⑤時間と空間の少ない中での技術の精度（クロスの精度。シュートの精度。ヘディングの強さ。ドリブルスピード。GKの技能）

であったが、この点についての視点も含めてゲーム分析をおこなった。

今回は、イギリス現地で視察分析した6試合のうち、準々決勝のドイツ代表チーム（VSクロアチア戦）と準決勝のイングランド代表（VSドイツ戦）の2チームを対象とした。

【分析I】ドイツ代表チーム

VS クロアチア戦 欧州選手権準々決勝 マンチェスター（オールドトラフォード）

（2 VS 1 前半1-0 後半1-1） 15時 KICK OFF 23. 6. 1996

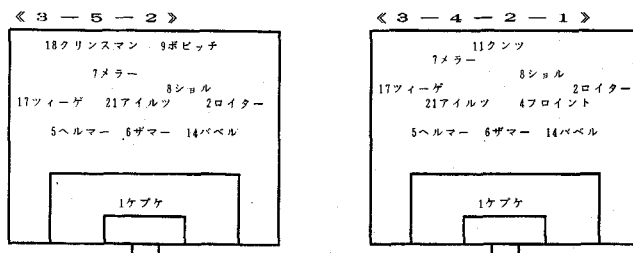
I. 試合前の観察ポイント

ドイツは予選リーグを2-0、3-0、0-0と無失点で勝ち上がってきており、一人一人のDF能力はもちろんのこと、組織的なDF戦術の高さ、さらにはバランスのよい攻撃や無理の無い攻撃戦術で堅実なサッカーを展開するであろう。一方、クロアチアは、スーケル、ボバンをはじめ世界のサッカー先進国で活躍する攻撃力のある選手が集まったタレント軍団であり、ドイツの堅固な守りをどのように崩すかがポイントであった。

II. 分析結果

1. 全体

(1) システム 3-5-2 → 後半3-4-2-1



(2) 各選手の役割

- 18クリンスマン ; 突破, チャンスメイク, ゴールゲッター
 - 9 ボビッチ ; ターゲットマン, ゴールゲッター, ヘディング
 - 7 メラー ; MF 上がりめでチャンスメイク,
 - 8 ショル ; MFでの攻守にからむ (特に右サイド) 時として守備的MF
 - 17 ツイーゲ ; 左サイドの守備, 突破, クロス, ロングスロー FK, CKヘディング要員
 - 21 アイルツ ; MFの守備の要, DFラインのカバーリング
 - 2 ロイター ; 右サイドの守備, 組立, スペースへのドリブル突破,
 - 5 ヘルマー ; 相手ストライカーのタイトマーク FK, CKヘディング要員
 - 14 パベル ; 相手ストライカーのタイトマーク FK, CKヘディング要員
 - 6 ザマー ; DFラインのカバーリング, MF中央スペースへの攻撃参加, チャンスメイク, ゴールゲッター
 - 1 ケプケ ; DFの統率, ゴール前スペースマーク, 安定したプレー
- 交替選手

- 4 フロイント ; MF (39min 18クリンスマン) 右サイドの守備的MF
 - 11 クンツ ; FW (46min 9ボビッチ) 左右スペースへの突破, スペースづくりの動き
 - 10 ヘスラー ; MF (88min 8ショル) 右サイド上がりめでのスペースへの突破と守備
- その他の登録選手

12カーン 16シュナイダー 22レック 3 ボーデ 20ビーアホフ

(3) スタイル ; 堅実な組織的プレー

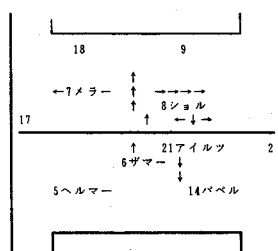
長所 — チーム戦術を徹底したバランスのいい攻守を見せる。

短所 — 意外性や創造性に欠け, 単調である。自信過剰になりがちである。

(4) 3ライン

- ①バックライン ; コンパクトにするため, 6ザマーが前に出て浅いラインを敷く。
但し, 相手GKキック等のルーズボールの競り合いの時は深く敷く。
- ②MFライン ; 7メラーが攻撃的で 8ショルが攻守に機動性をもち, 21アイルツが徹底して守備的かつつなぎ役をする。17ツイーゲ, 2ロイターは両サイドにワイドバランスを意識している。
- ③FWライン ; 18クリンスマン, 9ボビッチが前線でポストや突破の動きをタイミングよく繰り返す。特に9は前線から守備とRECOVERYを行う。

(5) ファンクショナル グループ ;



↑ 攻撃方向

ドイツ攻撃の特徴はユーティリティーリベロと称される6ザマーの攻撃参加にあり, この試合でも彼の得点が結果的に決勝点となっている。

6ザマーは7メラーの左右への動きや8ショルの下がる動きに合わせて, できた中央のスペースに上がり, スルーパスやシュートを狙う。その際, 6ザマーの抜けたポジションに21アイルツがはいり, 21アイルツのポジションに8ショルがはいるポジションチェンジを円滑に行っている。

- (6) 監督、コーチの性格。作戦傾向；Disciplineチーム戦術を徹底し、守備を重視する傾向にある。ゲルマン魂と称されるように精神的耐性が高く闘争心が強い。
- (7) 環境及び選手のコンディション

環境条件は芝良、天気晴れ 15時kick offで気温、気湿ともそう高くないが直射日光は若干暑い。選手は予選リーグを終了して、精神的に疲労感があるのか時折集中力を欠き不用意なプレーがみられる。

2. 攻撃

(1) 攻撃パターン

- ①FWの動きの傾向；両サイドスペースへの出入りや中央のスペースへの出入りを繰り返す
- ②スペースの作り方、使い方；7メラーが左右8ショルが下がって6ザマーが使う。
- ③GKのフィード方法；ラインをあげてのボレーキック、プレスキック、またサイドスペースへのスローイングを用いる。
- ④攻撃の原則（幅、深さ、活動性、意外性）；両サイドを利用したサイドチェンジを繰り返す。幅と角度をつけた深さを意識したポジショニングをしている。

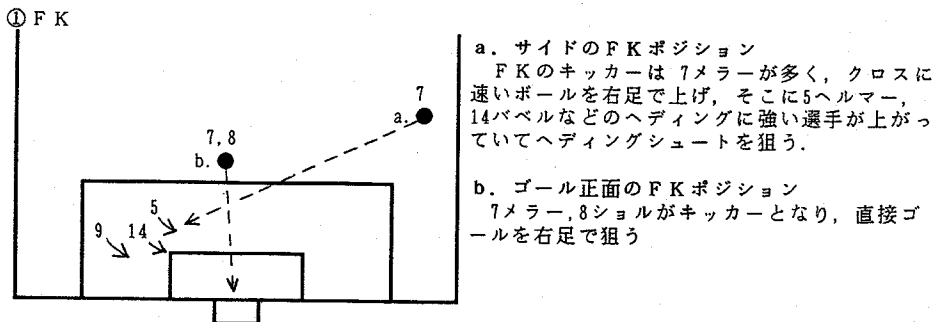
(2) 突破のパターン

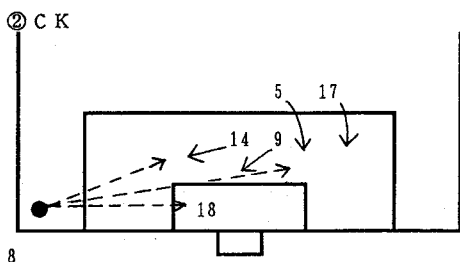
- ①両サイドの右2ロイター、左17ツイーゲからFW18クリンスマン、9ポビッチへ、また中央の7メラー、2、17から6ザマーへの展開が有効であった。
- 21分 6の右サイド突破でPKを誘い1得点
- ②右サイドの8ショルから縦のサイドのスペースに中央から攻め上がった14バベルに突破のパスが通り、その14からゴール正面にクロスをあげ6ザマーがゴールゲット。相手④退場直後で、ストッパー14のアシストでリベロ6の得点。(58分)

(3) 要注意人物

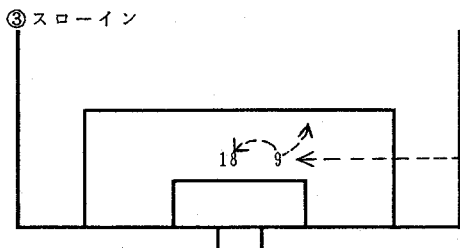
- ①1stストライカー；18クリンスマン、2ndストライカー；6ザマー
- ②ゲームメーカー；7メラー
- ③チャンスメーカー；7メラー、8ショル
- ④走スピードのある選手；18クリンスマン、7メラー
- ⑤運動量の多い選手；8ショル、21アイルツ

(4) セットプレーの傾向（方法 キッカー 配置 狙い）





キッカーは 8 ショルが多く、右足でニアの 18 クリンスマンかファーサイドの 5 ヘルマー、14 バベル、17 ツイーゲに速いボールを合わせる。



左サイドからは 17 ツイーゲのロングスローがあり、ゴール前で FW がヘディングで競り、こぼれ球を MF が狙う。また、ロングスローと見せかけてできたスペースでショートスローを行う

3. 守備

(1) 守備の方法

ストッパー 5 ヘルマー、14 バベルは、相手 FW をタイトにマンマークし、21 アイルツと 6 ザマーは中央で 2 ロイター、17 ツイーゲは両サイドでスペースマークをしていた。9 ボビッチの RECOVERY と DF ラインの押上で中盤からコンパクトに厳しく守備をし、ミドルサードでボールを奪っていた。また、DF ラインが押し上げてできるビハインドのスペースを GK 1 ケプケが読んでカバーしていた。オフサイドトラップの掛け方は、リベロの位置に合わせて周囲が掛けるが、あまり多用していない。

DF ラインの構成；5、14 は一対一に強く、タイトなマンマークをしき、6 はフォアリベロで DF ラインの前でスペースマークをする。

(2) 失点のパターン

空中戦では、身長が高くヘディングが強い。速攻への対応としては攻撃から守備への切り替えが速く簡単には崩れない。サイドチェンジへの対応は、バランスのいいポジションニングと素早いチャレンジで相手に数的優位を許さない。サイド攻撃への対応は、左 17 ツイーゲ、右 2 ロイターがサイドの突破を阻止していた。

しかし、中央突破への対応は完全ではなくリベロの穴を突かれていた。例えば 6 ザマーが自チーム DF ラインの前で無理につなぎをやりようとしているとき、相手フォアチェックを受けボールを奪われる場面があり、51 分には失点につながった。(失点の状況；6 ザマーが相手と競り合いながら彼の代わりに最終ラインにいた 4 フロイントに逃げの短いパスを出し、そこに相手 FW ② がプレスをかけゴール正面でボール奪取し、ゴール前でノーマークの ⑨ にパス、⑨ は GK 1 ケプケとの一対一からドリブルでかわして得点をあげた。)

また、6 と 21 のバランスが悪くふたりがサイドでだぶってしまいゴール前が薄くなる

場合、クロスをあげられ、フリーでヘディングシュートされる場面があった。

(3) 守備の中心人物の把握

① GKの能力；

DFラインをあげたときの判断はよくハイボールに対する処理も安定している。シュートへの反応も素早く守備範囲も広い。バックパスへの対応で一度SAFETY FIRSTのミスをおかした。

② リベロの能力；

積極的なオーバーラップによる攻撃参加、スルーパス、シュート力の能力も高い。DFラインをあげ、その前で積極的な守備をする。フィードの精度も高い。

4. ま と め

- (1) 攻撃面では、ユーティリティーリベロの6ザマーの攻撃参加が効を奏し、突破や得点のチャンスにつながっていた。ただし、逆にその攻撃参加は、中盤の底で彼が絡んでボールを奪われた瞬間に守備のバランスを崩していることがあった。また、基本的には危険を冒さない組織的で堅実な展開であったが、時として、集中力を欠いた不意なパス交換が観られピンチを招いていた。
- (2) 守備面では、各人の守備能力が高く、組織的には、FWのRECOVERYやDFラインの押上によって中盤をコンパクトにし、包囲してボールを奪っていた。特に中盤における21アイルツの献身的で確実な守備が相手の攻撃のチャンスを数多く阻止していた。しかし、ドイツゴール前で、ファーサイドへのクロスボールの対応が悪いときが観られた。
- (3) 体力的には、相手が後半10人になったこともあって、試合終了まで活動量やスピードも落ちず、精神的にも攻守にわたって積極的にプレーしまとまりもあった。
- (4) 指導上のポイントとして重要と考えられる冷静な読みについては、攻守に渡って鋭く、攻撃では、ワンタッチプレーによる突破、守備では相手のパスコースを読んだポジショニングやインターセプトが頻繁にみられた。また、日本の問題点として挙げられる技術面では①パススピードは速く質も高い、②ワンタッチコントロールで③ボディーシェイプができ。④ゴールサイドのポジショニングがしっかりとできていた。⑤時間と空間の少ない中での技術の精度も高かった。(特にシュートの決定力。ドリブルスピード。GKの技能)

【分析Ⅱ】 イングランド代表チーム

VS ドイツ戦 欧州選手権準決勝 ロンドン (ウェンブリー) 26. 6. 1996

(1 VS 1 前半1-1 後半0-0 延長前半0-0 後半0-0 PK戦5-6) 20時30分 KICK OFF

I. 試合前の観察ポイント

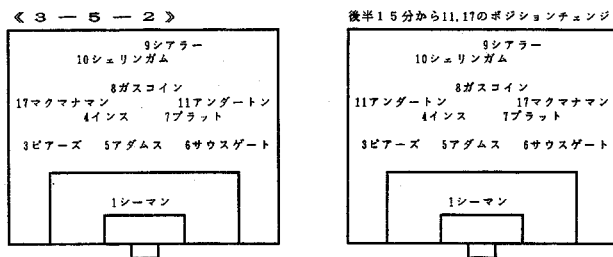
イングランドは予選リーグを1-1, 2-0, 4-1と徐々に調子を上げていき、準々決勝では攻撃の不調はあったものの主将 5アダムスを中心としたDFとGK 1シーマンの活躍で0-0の後のPK戦を勝ち上がってきて、雰囲気もよく調子の波に乗っている。DFラインを4人にするか3人にするのか、また、攻撃の中心である 8ガスコインのコンデ

ション、主砲シアラーの決定力等がポイントとなるであろう。一方、ドイツは主将18クリンスマンを負傷退場で欠くものの、安定した組織的攻守の中からリベロ6ザマー、MF7メラーを中心にイングランドのDFラインを崩しにかかるであろう。

II. 分析結果

1. 全体

(1) システム 3-5-2



(2) 各選手の役割

- 9 シアラー ; ゴールゲッター, ポストプレー
- 10 シェリングガム ; ポストプレー, 下がってゲームメイク, チャンスメーカー, ゴールゲッター
- 8 ガスコイン ; MFでチャンスメイク, シャドウストライカー
- 7 プラット ; 豊富な活動量でMFでの攻守にからむ, 守備的MFとして右サイドも担当
- 17 マクマナマン ; 左サイドの守備 (後半右サイド), ポジションチェンジによる左からインサイドの攻撃
- 4 インス ; MFの守備の要, 中盤での攻撃のつなぎ, DFラインのカバーリング
- 11 アンダートン ; 右サイドの守備 (後半左サイド), 7との連携で右サイドの攻撃を担当, 右足のクロス
- 3 ピアーズ ; 3バックゾーンDFで左ゾーン担当, 左サイドで左足の縦パス, クロス
- 6 サウスゲート ; 3バックゾーンDFで右ゾーン担当, ヘディング要員
- 5 アダムス ; 3バックゾーンDFで中央ゾーン担当, 中盤での攻撃のつなぎ, FK, CK ヘディング要員, DFの統率
- 1 シーマン ; DFの統率, ゴール前の安定したプレー

その他の登録選手

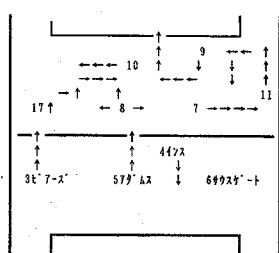
- 13 フラワーズ 22 ウォーカー 16 キャンベル 19P. ネビル 20 ストーン
- 14 バンビー 18 フェルディナンド 21 フォーラー 2G. ネビル

(3) スタイル ; 選手の活動量をいかしスピード感のある躍動的展開と気迫みなぎるプレー 長所-攻守の切り替えの速さとポジションチェンジの連携 短所-オフサイドトラップのリスク, ラストパスの精度

(4) 3ライン

- ①バックライン；コンパクトにするため、3ピアーズ、5アダムス、6サウスゲートの3人によるゾーンDFをしき、積極的にオフサイドトラップを仕掛ける。
- ②MFライン；8ガスコインが攻撃時には中盤で縦横無尽に動き回り、7ブラットは右サイドを中心に攻守に機動性を持ち、4インスが守備的かつなぎ役をする。17マクマナマンは左の中盤からインサイドへの、11アンダートンは右のウイングバックの動きをする。後半15分から17と11の担当が交代した。
- ③FWライン；9シラーは前線に位置し、10シェリングムは下がってポストやスペースを作る動きを繰り返す。特に10は前線から守備とRECOVERYを行う。

(5) ファンクショナル グループ；



↑ 攻撃方向

イングランドは積極的なポジションチェンジによりできたスペースを有効に使っていた。例えば、9シラーが下がったところに11アンダートンが下がり、また11アンダートンがあがったところに7ブラットが右サイドを使っていた。左サイドでは、17マクマナマンのインサイドへのプレーとガスコインとの連携、中央での10シェリングムとのポジションチェンジが観られる4インスの下がる動きに合わせて、できた中央のスペースに5アダムスが上がり展開を行う

(6) 監督、コーチの性格。作戦傾向；積極的なゲーム展開、ダイレクトプレー（GO FOR GAOL）を意識し、サッカーの母国、ホストカントリーとしてのプライドも高い。

(7) 環境及び選手のコンディション

環境条件は芝良、天気晴れ微風。20時30分のkick offのため夏至後でまだ明るいナイト照明つき。気温、気湿ともそう高くなく初夏としては涼しい。選手は、大会の後半にも関わらず地元開催とあってか身体的にも精神的にも充実しているようである。

2. 攻撃

(1) 攻撃パターン

- ①FWの動きの傾向；ポスト役として中央のスペースへの出入りやウイングのポジションにはいる。
- ②スペースの作り方、使い方；10シェリングムが左右または下がって、あるいは17マクマナマンが左サイドからインサイドに入って、等と頻繁にポジションチェンジを繰り返しスペースを作り、それをファンクショナルグループの選手が使う。
- ③GKのフィード方法；DFラインをあげてドリブルからインフロントキック、スローインを用いる。
- ④攻撃の原則（幅、深さ、活動性、意外性）；右サイドのスペースを利用した突破や、運動量を武器に頻繁なポジションチェンジで、相手DFのバランスを崩しにかかる。また、角度をつけてサポートのポジションを取り、8ガスコインのオーバーやフェイクで意外性のある展開が観られた。

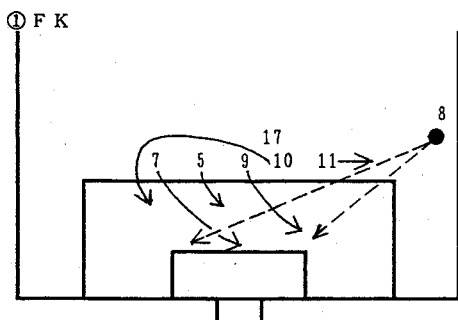
(2) 突破のパターン

- ①中盤右サイドスペースを7ブラットと11アンダートンのコンビで突破し、そのクロススを9シアラーもしくは2列目から上がった8ガスコインがゴールを狙う展開が有効であった。
- ②中盤左サイドでは8ガスコインや10シェリンガム、17マクナマナのコンビによるドリブル、くさびからの展開で突破していた。
- ③セットプレーを重視し、工夫を凝らしている。3分左CKを8ガスコインが右足でスワーブキックでニアの5アダムスを狙い、5がスリップヘディングで後ろにすらしたところに9シアラーが飛び込んで来てヘディングシュートで得点した。

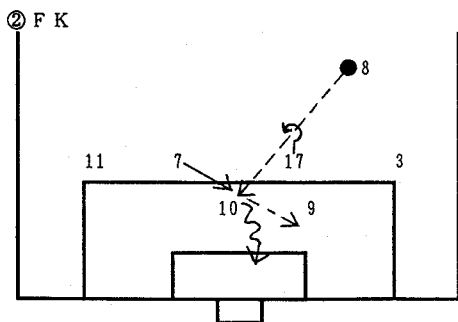
(3) 要注意人物

- ①1stストライカー；9シアラー 2ndストライカー；8ガスコイン
- ②ゲームメーカー；8ガスコイン
- ③チャンスメーカー；8ガスコイン，17マクマナマン
- ④走スピードのある選手；11アンダートン，17マクマナマン
- ⑤運動量の多い選手；7ブラット，8ガスコイン，4インス

(4) セットプレーの傾向 (方法 キッカー 配置 狙い)

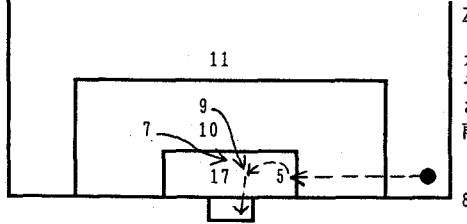


a. 角度の無いFKポジションからのパターン
FKのキッカーは8ガスコインが多く、右サイドのゴールラインに近いところでは、11アンダートンがスワーブキックでニアやファーを狙う。ゴール前には5アダムス、9シアラー、10シェリンガムなどのヘディングに強い選手が上がっていてヘディングシュートを狙う。その際、直線に並んだ位置から11アンダートンはニア、10シェリンガムはファーに回り込み、9シアラー、7ブラットはニア、5アダムスは9、7の後ろからゴールを狙う。



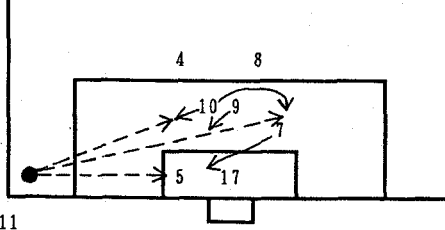
b. 角度のあるFKポジションからのパターン
FKのキッカーは8ガスコインで17マクマナマンへのくさびのパスと見せかけてオーバーし、10シェリンガムのポストプレーとなり、ダイアゴナルランの7ブラットに落とすか、9シアラーに出してシュートを狙う。

③左CK



左CKキッカーは8ガスコイン、右足でニアの5アダムス、9シアラー、ファーの10シェリンガムにスワープボールを合わせる。その際、9は自分のマークマンを10にブロックさせニアポスト前に走り込む。また、7もGK前に走り込む。

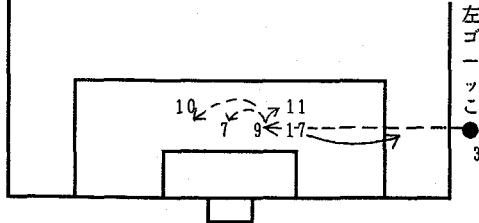
④右CK



右CKキッカーは、11アンダートンで右足のスワープキックでニアの5アンダートン、やや角度をつけて10シェリンガム、ファーの9シアラーを狙う。その際、10は9に自分のマークマンをブロックさせてファーに回り込む。また、7もGK前に走り込む。

11

⑤スローイン



左サイドからは3ピアーズがロングスローをしゴール前では、17マクマナマンがショートスローを狙い、9シアラーがロングスローを、7ブラットや11アンダートン、10シェリンガムがそのこぼれ球を狙う。

3. 守備

(1) 守備の方法

厳しく前線からフォアチェックすることは少なく、ハーフラインあたりからFWが守備を始めことが多い。DFラインは5アダムスを中心とした3人のゾーンDFをペナルティーエリアの前に敷くことが多く、攻撃時にはDFラインの押し上げが心がけていた。中盤は4のインスがスペースをつぶし、それに機動力のある7ブラットがRECOVERYでプレッシングしていた。右サイドの守備は11アンダートン（後半17）が担当していたが、左サイドは17マクマナマン（後半11）のポジションチェンジが多いため4インスを中心に17のほか8ガスコイン、3ピアーズが連携して担当していた。オフサイドトラップの掛け方は、リベロの位置に合わせて周囲が掛けていた。

(2) 失点のパターン

空中戦には、長身の5アダムス、GKシーマンを中心に強い。速攻への対応としては攻撃から守備への切り替えの意識が高く、MFの選手のボールへの対応が速く速攻を阻止していた。サイドチェンジへの対応は、中盤をコンパクトにして素早いチャレンジで相手にサイドチェンジの時間を与えていない。サイド攻撃への対応は、左3ピアーズ、右11アンダートンがサイドの突破を阻止していた。

しかし、3人のゾーンDFは瞬間のコントロールや副審のミスを引き起こすリスクがある。例えば、相手⑦メラーからペナルティーエリアの右前方にいた⑤ヘルマーへのく

さびのパスをオフサイドに掛けようとして副審のミスで失敗し、⑤からのアーリークロスで⑩クンツにゴール前へ走り込まれスライディングしながらのインサイドのワンタッチでシュートを決められた(16分)。またその後も右サイドの6サウスゲートのところで相手⑩クンツにオフサイドトラップを突破され、危険な場面を作っていた。

(3) 守備の中心人物の把握

①GKの能力；

DFラインの後ろのスペースへの判断もよく、ハイボールに対する処理も安定している。シュートへの反応も素早く守備範囲も広い。バックパスへの対応もよく、足の技術も高かった。

②リベロの能力；

一対一やヘディングに強く、ゾーンDFのラインをしっかりとコントロールしていた。また、中盤のスペースに上がりつなぎをすることもあった。セットプレーの時は積極的にゴール前に上がってシュートに絡んでいた。

4. まとめ

- (1) 攻撃面では、活動量の多いポジションチェンジを基盤に 8 ガスコインを中心とした中盤の細かい崩しからサイド攻撃を仕掛け、ポイントゲッターの9シアラーに合わせるスピーディーな展開で試合を優位に展開していた。特に右サイドからの攻撃は再三好機を作っていた。また、セットプレーによるヘディングシュートの威力も高かった。
- (2) 守備面では、DFラインのオフサイドトラップによって中盤をコンパクトにし、攻撃から守備への速い切り替えによるMFのRECOVERY等で中盤のボールを奪っていたが、中盤のプレッシャーが甘くDFラインが下がりすぎ、相手DF選手の攻撃参加を楽にさせる場面も多かった。中盤の守備では4インスの素早い相手への寄せや守備が相手の攻撃のチャンスを数多く阻止していた。しかし、オフサイドトラップのリスクが決定的場面で影響することになった。
- (3) 体力的には、延長戦の試合終了まで活動量やスピードも著しく落ちることもなく、精神的にも攻守にわたって積極的にプレーし、7万人以上のサポーターの応援の中、集中力も途切れることはなかった。
- (4) 指導上のポイントとして重要と考えられる冷静な読みについては、事前の状況観察、判断からスペースを素早く突く動きやパス、守備のポジショニングが随所に観られた。また、日本の問題点として挙げられる技術面の比較では①パススピードは速くワンタッチパスでの質も高い、②ワンタッチコントロールで③ボディーシェイプができ、④ゴールサイドのポジショニングがしっかりとできていた。⑤時間と空間の少ない中での技術、特にドリブルやショートパスの精度、ヘディングのシュート力も高かった。

おわりに

今回は1996年6月第10回欧州サッカー選手権イングランド大会にて優勝したドイツ代表チームと、準決勝でそのドイツを最後まで苦しめた地元開催のイングランド代表チームを対象にゲーム分析を行うことで、現在のサッカー先進地域である欧州のサッカーの戦術的特徴を把握しようとした。その結果、①システムとしては、2トップに対するDFは3人

で行う3-5-2が中心ではあったが、各チームとも選手の特徴を活かし、例えば3DFはマンマークにリベロもしくはスウィーパーか、ゾーンDFであったり、フォアチェックあり、フォーリングバックあり、変形のワントップであったりした。②攻撃面では、ユーティリティーリベロと称されるドイツの6ザマーの機能が特徴的でその活躍は顕著であった。また、活動量の多いポジションチェンジを活用したり、効果的なサイド攻撃が観られ、得点チャンスには能力の高いポイントゲッターの存在が大きいことが推察された。③守備面では、各人の守備能力が高く、組織的には、FWのRECOVERYやDFラインの押上によって中盤をコンパクトにし、包囲してボールを奪っていたが、特に中盤における有能な守備的MFの重要性が認識された。また、オフサイドトラップのリスクが決定的場面で影響することも認められた。④体的には、活動量やスピードも落ちず、精神的にも攻守にわたって積極的にプレーしていたが、負傷者がでたり、時として、集中力を欠いたプレーも観られ、大会期間中のトップフォーム持続の困難さも挙げられ、サブスティチュートメンバーのコンディショニングの重要性も示唆された。

また、指導上のポイントとして重要と考えられる冷静な読みについては、攻撃では事前の状況観察、判断からスペースを素早く突く動きやワンタッチプレーによる突破のパス、守備では相手のパスコースを読んだポジショニングやインターセプトが随所に観られ、洗練されたそれらの能力の高さが認められた。日本の問題点として挙げられる技術面では①パススピードは日本代表選手の2-3割速く観られ、ワンタッチパスでの質も高くミスが少ない、②ワンタッチコントロールで③ボディーシェイプができ、④ゴールサイドのポジショニングも確実に実行していた。⑤4年前のスウェーデン大会の分析同様、特にシュートの決定力、ドリブルスピード、ショートパスの精度、ヘッドイングのシュート力、GKの技能にはその能力の高さに日本選手との違いが観られた。

参考文献

- 1) 池田郁雄編：ヨーロッパサッカー96，ベースボールマガジン社，1996.
- 2) 財団法人サッカー協会：強化指導指針 1996年版，J.F.A news 増刊号，1996.
- 3) Official Matchday Programme: Group C, UEFA EUROPEAN FOOTBALL CHAMPIONSHIP-8th-30th JUNE 1996, C1994 UEFA TM, 1996.
- 4) Official Matchday Programme: Quarter-Finals Groups A & B, UEFA EUROPEAN FOOTBALL CHAMPIONSHIP-8th-30th JUNE 1996, C1994 UEFA TM, 1996.
- 5) ハンス オフト：COACHING ハンス オフトのサッカー学，小学館，1994.
- 6) 瀧井敏郎：ワールドサッカーの戦術，ベースボールマガジン社，1995.